

平成28年9月定例会 文教委員会の概要

日時 平成28年10月 7日(金) 開会 午前10時 4分
閉会 午後 0時21分

場所 第8委員会室

出席委員 日下部伸三委員長

小川真一郎副委員長

細田善則委員、中屋敷慎一委員、木下高志委員、齊藤正明委員、井上将勝委員、井上航委員、鈴木正人委員、石渡豊委員、前原かづえ委員

欠席委員 なし

説明者 高木康夫教育委員会委員長、関根郁夫教育長、櫻井郁夫副教育長、
袖木博教育総務部長、古川治夫県立学校部長、安原輝彦市町村支援部長、
小澤健史教育総務部副部長、渡邊亮県立学校部副部長、
吉田正県立学校部副部長、松本浩市町村支援部副部長、
藤田栄二市町村支援部副部長、佐藤裕之総務課長、岡部年男教育政策課長、
佐藤卓史魅力ある高校づくり課長、廣川達郎財務課長、横松伸二教職員課長、
高橋和治福利課長、小島克也県立学校人事課長、羽田邦弘高校教育指導課長、
依田英樹生徒指導課長、加藤健次教職員採用課長、加賀谷貴彦保健体育課長、
宇田川和久県立学校部参事兼特別支援教育課長、
加藤秀昭県立学校人事課学校評価幹、関口睦小中学校人事課長、
大根田頼尚義務教育指導課長、橋本強家庭地域連携課長、
芋川修生涯学習文化財課長、吉野雅彦人権教育課長、
阿部正浩市町村支援部副参事

会議に付した事件並びに審査結果

1 議案
なし

2 請願
なし

所管事務調査

東松山市内で起きた少年死亡事件への対応について

報告事項

- 1 教科書謝礼問題への対応について
- 2 平成28年度全国学力・学習状況調査結果について

【所管事務に関する質問（東松山市内で起きた少年死亡事件への対応について）】

細田委員

- 1 報道によると当該生徒は中途退学し、学校からは離れていたと聞いた。一般論として中途退学時に退学願いを出すのが、退学理由は一身上の都合とごまかしたように記録されているようだ。学校は生徒の中途退学の理由を把握し、記録しているのか。
- 2 東松山市の場合は、いじめ・非行防止ネットワークという組織があり、加害者の生徒は問題生徒として把握されていたにもかかわらず事件が起きてしまった。このようなネットワークで問題生徒として認識されている生徒に対し、教育委員会、学校がどのように対応しているのか。
- 3 加害少年たちが任意のグループを組織して活動していたことが事件を重大化させた要因だと思っている。学校としては、校外の任意グループを認識していたのか。また、対応していたのか。
- 4 少年たちは、小学生の頃から問題行動を繰り返していたと聞いている。小中高で学校の情報や生活状況、非行の状況は引き継がれていたのか。
- 5 ボクシングなど部活動、スポーツを充実させることで今回の件は避けられたのではないのか。

生徒指導課長

- 1 中途退学は各学校、各生徒により対応は様々である。今回の場合についても、本人がアルバイトをしたい、学校の指導を受けたくないなどと言っており、様々な理由がある。学校は中退をさせるべきでないという姿勢で当たっている。本人、保護者に面談を繰り返し行い、本人の意向を確認している。中途退学の許可については、非常に難しい判断になるが、今回の退学許可はやむを得ないものだと考えている。
- 2 学校には非行少年への対応について、き然とした対応と粘り強い姿勢で指導を行うよう呼び掛けている。しかし、学校の指導が入らないことも多くあり、全てが改善に向かっているわけではない。そうした非行少年に対して、警察、地域の自治会、PTA、保護司、民生委員、児童委員など様々な方が連携して地域の中で見守ってもらうように学校を中心としてネットワークを組んで対応している。今回の事案もこのネットワークで名前が挙がっていた子供たちであり、こうした結果となり残念である。ネットワークで情報を共有して、地域で見守りをお願いするとともに学校の中で粘り強く指導を続けていく。
- 3 一部の被疑者少年が非行グループに入っていたと報道されている。非行グループへの加入の有無を把握することは生徒指導上有効であるが、カラーギャングと呼ばれるグループなどの場合は集団としての体を成していない場合が多くある。非行少年たちが群れているという表現のほうが適当な場合が多いと考えている。そのようなことから、加入や非加入を認知することは難しく今回の場合も学校では加入を把握していない。一方で、警察やネットワークとのつながりの中で、非行少年グループに入っていたことは認知していた。非行少年グループに入っている子供への対応や、また、いかに入らないようにするかということは、大きな課題であると考えている。入らせない、抜けさせる、そうした指導を具体的にどのように展開していくかをしっかりと検討していく。
- 4 課題のある児童生徒を継続的、組織的に支援していくためには学校間の連携が必要と

考える。小学校、中学校では積極的な連携を図っているが、情報共有はもとより例えば小中学校で乗り入れの指導を行ったり、複数学年で合同授業や活動を行ったりしている。小学生が中学校に慣れるだけでなく、中学校側が小学生を把握する良い機会となっている。中学校と高校の連携は、設置者が違うことや入試制度があるなど一定の制約があるが高校にとって生徒指導上、課題のある子供の情報は大切である。入学前に情報を集める努力を現在も行っているが、より組織的に情報を把握できるよう対応を促していく。

5 部活動は自主的、自発的な活動であり、子供たちの協調性や責任感、連帯感、学校への一体感、友達との友情を育むには大変有効なことと考えており、生徒指導上も大変有用なものと考えている。魅力ある部活動は、子供たちにとって魅力ある活動であり、生徒のバランスの取れた生活や成長に資することから、今後も部活動の活性化に努めていく。

細田委員

正當に卒業した場合であっても問題行動が多かった場合には、ネットワークで情報共有を行うのか。また、中途退学する場合に原因をしっかりと記録する仕組みはあるのか。

生徒指導課長

いじめ・非行防止ネットワークについては在学中の子供に対応しているものであり、中途退学後の状況をネットワークで把握することは現在では困難である。中退後の子供への支援については、学校から教育相談、進路相談として積極的に関わることは困難である。中退後、アルバイトなどを行っている者が多くいるが、長くは続かない状況もあり中退後も、子供の自立に向けた支援が必要と考えている。退学前から退学後を見据えて、自立を促す、支援する機関などにつなげていく努力が必要と考えている。今回の事件を踏まえ、中退した子供を、支援する機関にどのようにつなげていけるのかを検討していく。

中屋敷委員

報道で学校名が出ている。この学校の「小学校、中学校で学校に行けなかった生徒に手を差し伸べる」との理念はすばらしく、いじめ防止や不登校対策にしっかりと取り組んでいる。しかし、今回の報道により当該校を退学したと伝えられ、現在在学している生徒が気の毒である。最後のチャンスとして働きながら一生懸命通っている子供もいる。当該校は中途退学するリスクは高い。しかし、もう一度学び直しをするために生徒は登校しているのに、当該校は危ないと言われるのが残念である。教育局として現在通っている生徒の学びへの意欲をどのように高めるのかを伺う。

生徒指導課長

当該校は自立を大切にしている高校である。不登校だった学生など様々なライフスタイルを持った子供が通ってくる学校で、そうした子供たちのチャレンジを支援しており、一定の成果を上げている。平成22年から平成24年に入学した生徒は43%が不登校であったが、そのうちの68%の生徒の不登校が改善した。こうした事件が起これば残念であるが、こうした子供のチャレンジを支援する高校を教育局としてもしっかりと支援していこうと考えている。校長と継続的に話し合いをしており、学校への支援をいろいろ考えている。一人一人の子供に自尊感情、自己有用感を与え、学びへの意欲を与えることが大切であると考え、そのような観点から学校を支援していく。

中屋敷委員

是非、学校の存在価値を下げないようにしてほしい。じりつには、自立と自律があるが後者の自律をどう育てるかが大切である。自律を育む取組をしっかりと行ってほしい。

生徒指導課長

自分を律する心を育むためには、自他ともに認め合うことのできる人間性や社会性を育む教育が大切と考えている。褒められることがないとか、認められることがない生徒が多く入学している。良いところを認め、褒め、自分の大切さ、他人の大切さをしっかり教えていくことが大切であるとする。当該校では、自律心を育てるプログラムを行っている。教育局として相談体制の充実や、そうしたプログラムがより一層充実したものになるように支援していくつもりである。

木下委員

退学後の支援や学校間の連携をしていくとの話だが、今回の事件は夏休み期間中の深夜に発生した事件である。このような状況下では、学校での指導もちろん大切だが、学校だけですべてを解決しようとしても難しいと思う。教育局として、関係市と合同で検証を行っているとのことだが、自分のところだけで全部受け止めないで、福祉、青少年の健全育成を行う学校以外でもこの課題に対してどうすべきかを発信していくべきではないか。卒業後、退学後の支援も必要だが、社会全体でこの課題にどうすべきかを発信していかないと再発防止にならないと考えるが、教育局としてどのように考えるのか。

生徒指導課長

社会全体でこの課題に取り組まないと、このような事件が防げないという御指摘だと受け止める。木下委員の意見を踏まえながら、学校教育と学校教育以外の役割を整理し、合同検証委員会の事務局として今回の事件についての検証作業をしっかりと行っていく。